

東南アジアにおける コメ価格の動向と今後の展望

1. 高騰から一服感を見せる コメ価格

東南アジアでは昨年末以降、物価上昇が顕著となっており、インフレ圧力が強まっている。特にコメ価格の場合、今年3月から5月中旬にかけて騰勢を強め、香港・フィリピン・ベトナムでは一部の地域で見られた現象とはいえ、庶民による買い溜め、小売・流通業者による売り惜しみ騒動が発生した。これらの動きに対し東南アジア各国は、「問題の所在はコメの需給逼迫ではなく、上昇を続けるコメ価格に対する心理的な動揺・不安感が強い」として、コメの在庫は十分あることを繰り返し説明するとともに、政府補助金によって支えられた低価格米の供給を拡大するなど、沈静化に向けた取り組みを行った。各国による迅速な対応なども功を奏し、5月中旬にはこれらの騒ぎは収束した。コメの国際取引価格ならびに小売価格は、同月下旬以降、高騰から一服感を見せている。

2. コメの価格見通し

国連食料農業機関（FAO）の報告書「Food Outlook 2008 May」は、①コメ国際価格の高止まりは年後半まで続くことが見込まれる、②世界のコメ生産量は、08年に過去最高となる見通し。但し、コメ主要輸出国の輸出規制やミャンマーのサイクロン被害などの影響で、市場価格は押し上げられている、③主要輸出国による輸出規制が緩和されない限り、コメ価格の高止まりは少なくとも今年7月から9月まで続くことが見込まれる、と指摘している。東南アジアにおける08年のコメ生産量は約1.2億トン（予測）、需要は約1.0

億トン（予測）で、期末在庫は18万トンを見込んでいる。需給が安定しているにもかかわらず、3月から5月中旬にかけてコメの価格が騰勢を強めたのは、以下に述べる供給面での「複合要因」が強く影響している。

3. 「複合要因」による コメ価格の上昇

トウモロコシ・大豆・小麦といった国際穀物商品と異なり、コメはアジアにて主食としての役割を果たし、総じて自国内で生産・不足分は周辺国から調達するといった、いわばアジア域内にて自己完結的な需給関係がある穀物である。そのような背景を持つ中、下記要因が重なり価格急騰に繋がった。

第一に、原油高の影響により、コメの生産コストは上昇している。原油価格の上昇に伴い、化学肥料・農薬などの価格は値上がりし、購入負担が増加している。また、耕運機、稲刈り・脱穀機、コメ乾燥機、輸送トラック用の燃料価格の上昇も大きな負担となっている。第二に、稲作では安定的な水の確保が必要とされる中、昨今における水資源の制約等により、灌漑用水の使用料が値上がりしている。また、特に経済が好調な国ほど、農業従事者の多くは工場労働者として第二次産業に従事するようになり、農繁期には過疎地・隣国の出稼ぎ農民などの外部労働力に依存するようになっている。外部労働力に対する支払い賃金も上昇しており、これらもコメの生産コストを押し上げている。第三に、有力なコメ輸出国であるミャンマーの水田が5月初旬の大型サイクロンにより、広範囲にわたり大きな被害を受けた。このため、東南アジアのコメ需給に対する逼迫懸念が強まった。

4. コメ輸出国の輸出規制による 動揺

上述の要因にてコメ価格の上昇圧力が強まっていた中、コメ輸出国が相次いで発表したコメ輸出禁止・制限措置は、東南アジア域内のコメ輸入国だけでなく、輸出国における庶民の間でも動揺が広がった。アジア域内ではインド・ベトナム・カンボジアがコメの輸出禁止措置、中国・インドネシアが輸出制限措置をとっており、背景として自国内での物価上昇の抑制、国内での安定供給の確保を本来の目的としていた。

フィリピン、香港、ベトナムでは、一部の地域で見られた現象とはいえ、コメ価格が更に高くなることを恐れた庶民、特に低所得者層が買い溜めを急ぐ→価格上昇を見込んだコメ小売・流通業者は売り惜しみをする→庶民の間でコメの需給逼迫感が募り、購入先を捜し求める→コメの小売・流通業者は更に売り惜しみをするといった悪循環が発生した。これらの騒ぎに対し、フィリピン、香港、ベトナムの政府関係者は、「国内には十分なコメがある」ことを繰り返し強調するとともに、政府補助金によって支えられた低価格米の供給を拡大するなど、迅速な対応が功を奏したこともあり、5月中旬には、これらの騒ぎは収束した。

5. コメ輸出再開とコメ価格の 安定化

同月中旬、コメの有力生産・輸出国であるタイならびにベトナムは、「コメの収穫が早まる」ことを示唆、また、インド政府はコメ輸出制限の一部解禁の可能性を示唆した。コメの安定的な需給見通しがより明らかになるにつれ、コメの国際入札価格、卸売・小売価格は、徐々に値を下げ始めた。同月下旬、カンボジアはコメの輸出規制を解除し、現在、ベトナムも7月からのコメ輸出再開

に向けた準備を進めている。コメの輸出再開が本格化したことから、域内におけるコメの安定供給がより強まり、価格は高騰からの一服感を更に強めている。

6. 今後のコメ価格の展望

東南アジアにおけるコメ価格は、今後、若干ではあるが落ち着きを見せることが見込まれる。但し、2007年以前の水準には戻らず、その後は横ばいに推移することが予測される。OECD-FAOの「Agricultural Outlook 2008-2017 報告書」によると、コメの世界価格は02~06年度の平均（実績）は262.3ドルであったところ、07年度予測では361.0ドル、08年度に最高値390.1ドルを見込んでいる。09年度には367.9ドル、10年度は330.7ドルまで低下し、それ以降は330~340ドルの範囲で推移することを見込んでいる。

なお、コメ価格を展望するには、コメの生産コストそのものが上昇していることを十分踏まえるとともに、農作物であるだけに常に天候に左右されることも念頭に入れる必要がある。また、上述のとおり、コメはアジアの人々にとって主食であり、生活の基本物資であることから、需給動向に対して敏感に反応する傾向があることも改めて認識する必要がある。コメ価格の上昇は、庶民、特に低所得者層の生活に直接的な影響を及ぼすだけに、社会不安に直結する可能性も孕んでいる。フィリピンのようにコメの輸入依存度が高い国ほど、コメ価格の上昇による社会的影響が強いだけに、民生安定の観点からも、コメの安定供給・確保は不可欠となっている。また、野菜、卵、鶏肉類といった他の食料品価格は依然として上昇を続けており、インフレ圧力が更に高まっていることにも留意する必要がある。これらを踏まえながら、今後のコメ価格の推移を注意深く見ていくこととしたい。

(オリザ・サティバ)